

## 文化権力としてのヘゲモニー

君 塚 大 学

大学院の時代以来、断続的に権力論を齧ってきた。もう15年になるが、いまだに一冊の本に纏め上げることもできないでいる。これをこそ「うだちの上がない」というのかもしれない。そろそろ、腰を据え集中的に取り組んで形あるものを作り上げていかねばならない。そう思っているのだが、さてさてどうなる事やら。とにかく、のろくとも歩まねばならない。

これまで私が関心を寄せてきた権力現象は、政治的国家権力や経済権力、集団内地位権力やカリスマ的権力といったものではなく、むしろ文化権力ともいうべき現象である。文化権力とはあまり聞き慣れない用語だが、単純化して言えば、それは文化がもつ〈力〉であって、普段のわれわれには「権力」とは気付かれたり認知されたりしないが、それゆえ一層に始末に負えない、ある意味では非常に狡猾な〈力〉のことである。

文化の定義はいろいろあるが、一定の人々の広い意味での生活行動に見られる共通のパターンといった経験論的定義ではなく、そうしたパターンを産出している共有の観念体系としての文化という合理論的な定義を私は採っている。この意味での文化は、こまかい違いを無視すれば、他の用語、たとえば価値観、世界観、イデオロギー、解釈図式、前理解、地平、構造、コスモロジーなどと言い換えることが出来る。

こうした文化をわれわれは日常的生活行動の場面でいつも意識しているわけではない。意識するのはせいぜい規範的ルールぐらいのものである。(もっとも、ルールなど意に介さず自己利益に汲々とする輩もいるが。)しかし、意識されていないからといって、われわれの行動が文化に関係していないわけではない。むしろ意識下に潜在する文化こそが、われわれの行動を方向づけ、統御し、規制しながら産みだしてゆくのである。とはいえ、文化と行動とは直接的に結びつくのではなく、先にもふれたルールに媒介されると考えたほうが分

析的には好便だ。つまり、社会的世界を〈行動－規則－文化〉という3次元構造でとらえ、文化に重大な機能を想定する見方を採れるのである。「文化決定論」といった謗りに抗して、この分析枠組みを使いたいとは思っている。

この枠組みは、社会的世界一般の分析のためだけではなく、権力の分析のためでもある。こう言う所には、権力は社会の一部に局在するのではなく、社会に遍在し、隅々にまで満ちているという考えが仮定されている。この点についても批判がありうるが、やはり、この仮定を採っておきたいと思ふ。

こうした分析枠組みは、私が権力論を齧ってくる過程で非常に面白く感じ、また理論的に有効だと思った幾人かの議論に依存している。主なものは、S. ルークスの「3次元権力論」、S. クレグの「構造主義的権力論」、A. ギデンズの「構造化理論」、M. フーコーの「エピステモロジー的権力論」、T. クーンの「パラダイム論」などである。

この枠組みには、言うまでもなく、より込み入った概念的道具立てがある。それらの概念が十分に整備されているか検討しつづけなくてはならないという点はあるが、おおよそのものは出来たと思っている。そうであれば、この枠組みを使って、今や具体的な問題の分析に取り組むべきであろう。

その具体的な問題として、私が取り上げようと思うのは都市形成をめぐる権力関係である。より狭く言えば、震災後の神戸復興の社会過程に潜勢する文化権力の布置構造を浮き彫りにすることである。これは、F. ハンターやR. ダールなどの従来の地域権力構造論の部類ではない。「権力者は誰か」といったような権力行使主体の特定化ではなく、どんな解釈図式がヘゲモニーとなっているか、そのヘゲモニー関係はどのような様相を呈しているかといったことが分析課題なのである。神戸復興をめぐるのは、住宅再建に関する自己責任論に対する個人補償論、産業優先論に対する住民生活優先論、競争重視型政策に対する弱者配慮型政策、自然加工論に対する自然共生論、行政権力集中論に対する分権論など、争点がうずまいている。そこには文化的コンフリクトがあり、文化的権力関係がある。しかし、さらには、そうしたコンフリクトが少なくとも顕在的には観察されない所に、ある種のヘゲモニーが作動しているかもしれない。こうした問題を分析したいと思っている。